

第 7 章 特別支援学校（聴覚障害）の総括

本章では、前述の幼稚部（第 2 章）、小学部（第 3 章）、中学部（第 4 章）、高等部本科（第 5 章）、高等部専攻科（第 6 章）における調査結果の総括として、特別支援教育（聴覚障害）学校全体のデータに基づく結果を述べる。

I 結果と考察

1. 回答状況（前述の研究概要と同様）

1. 全国特別支援学校における回答状況

全国特別支援学校(聴覚障害)107 校(本校 95 校、分校・分室 12 校)に対して、メールにより各校の学校長に依頼文書と調査用紙(エクセルファイル)を配信し、調査依頼を行った。

その結果、107 校全ての学校から、2019 年 5 月 1 日現況として、在籍幼児児童生徒数 5,706 人、その内、人工内耳装用児数 1,894 人という回答を得た。このことから、全国特別支援学校（聴覚障害）在籍幼児児童生徒における人工内耳装用率は概ね 33.2%であることが明らかになった。

特別支援学校における人工内耳装用幼児児童生徒の数は、表 1-1 の通り、全体で 1,350 人分の幼児児童生徒に関する回答が得られた。令和元年 5 月 1 日現在の学校からの報告による人工内耳装用幼児児童生徒総数は 1,894 人であり、約 71.3%の回答率を示した。

なお、分析の際には、学部不明者 1 名、重複障害有無不明者 35 人の計 36 人を除く、重複障害なしの幼児児童生徒 1,009 人、重複障害ありの幼児児童生徒 306 人の 1,314 人を主な分析対象とした（分析内容によっては、1,350 人全員を対象とした内容もある）。

表 1-1 特別支援学校における対象幼児児童生徒数

学部\重複障害有無	重複障害なし	重複障害あり	計
幼稚部	261	49	310
小学部	344	118	462
中学部	167	74	241
高等部	199	60	259
専攻科	37	5	42
計	1,008	306	1,314
その他	学部不明 1	重複不明 35	36
合計	1,350		

2. 教員に関する集計結果

1) 集計結果

(1) 教員歴

幼児児童生徒 1,350 人に対して回答した教員の総数は、726 人であった。

726 人の年齢構成は、表 7-1 の通りであった。年齢の幅は 22 歳から 67 歳まで、平均 42.5 歳であった。

表 7-1 回答者（教員）の年齢構成

年 齢	20 歳台	30 歳台	40 歳台	50 歳台	60 歳台	未記入	計
人数(人)	121	189	206	142	29	39	726

(2) 指導歴

教員歴および各種学校等における指導歴を表 7-2 に示した。

聴覚障害児に対する指導歴は、5 年以下が全体の約 40%、10 年未満が全体の約 64% を占めていた。難聴学級や通級指導教室、通常学校での指導歴は、極めて短く、多くの教員が特別支援学校（聴覚障害）での指導歴が最も長かった。

表 7-2 回答教員の教育歴と各種学校での指導歴

年数 経歴 \	5 年以下	6 年 ～10 年	11 年 ～15 年	16 年 ～20 年	21 年 ～25 年	26 年 ～30 年	31 年 ～36 年	36 年 以上	未記入	計	平均 年数
教員歴	123	133	102	107	67	72	54	29	39	726	17.9
聴覚障害児に対する指導歴	291	176	81	70	28	20	11	6	43	726	11.3
特別支援学校（聴覚障害） での指導歴	312	174	82	60	25	19	12	5	37	726	10.2
特別支援学校（聴覚障害以外） での指導歴	444	111	65	36	14	2	2	2	50	726	4.7
難聴学級・通級指導教室での 指導歴	660	3	1	1	-	-	-	-	61	726	0.32
通常学校での指導歴	608	22	15	13	3	3	3	-	59	726	1.6

(3) 学習したい研修内容

人工内耳に関連し、希望する研修内容は、次のようなものであった。

概ね人工内耳に関する基礎的知識に関する内容と人工内耳装用児に対する指導法が多数を占めていた。

表 7-3 教員研修の希望内容

1. 人工内耳の基礎知識について(508)
・基礎的知識 (432)・手術、リハビリ、マッピング (39)・医療機関との連携 (20)・聞こえの特性 (17)
2. 人工内耳装用児の指導・支援について (274)
・指導、指導法、学習法 (203)・事例検討 (体験談) (40)・配慮事項 (9)・保護者支援 (8) ・進路の実態 (13)・重複障害 CI 児 (1)
3. 人工内耳装用児の発達について (88)
・子供および人工内耳子供の発達やその特長

4. 関連機関について (47)
・ 関連機関の説明 (28) ・ 関連機関に関する最新状況 (19)
5. 人工内耳の管理等について (44)
・ 管理方法 (24) ・ 他の器機との接続 (20)
6. 障害認識やアイデンティティについて (3)
7. その他 (70)
8. 特になし (23)

3. 担当幼児児童生徒が在籍する学級について

1) 担当学級の規模と人工内耳装用幼児児童生徒の割合

担当学級の幼児児童生徒数、および人工内耳装用幼児児童生徒数を表 7-4 に示す。

特別支援学校（聴覚障害）全体における担当幼児児童生徒数は、5.46 人、うち人工内耳装用幼児児童生徒は全体の 47.8%に当たる 2.61 人であった。担当幼児児童生徒数が 47 人の回答もあるが、通常の学級体制ではない、自立活動、聴能担当、音楽、美術などの専科担当による回答として考えられた。

表 7-4 1 学級あたり担当幼児児童生徒数と人工内耳装用人数

学部	対象幼児児童生徒数	担当幼児児童生徒数	人工内耳装用 幼児児童生徒数	幼児児童生徒全体における 人工内装用の割合 (%)
幼稚部	310	5.68	2.97	52.3
小学部	462	5.64	2.75	48.8
中学部	241	5.63	2.44	43.3
高等部	259	4.97	2.20	44.3
専攻科	42	4.31	2.21	51.3
合計	1,314	5.46	2.61	47.8

2) 医療機関との連携について

(1) 連携の有無について

連携の有無は、表 7-5 に示すとおりである。全体として、連携ありが連携なしより、幾分高い数字を示した。幼稚部は、連携ありが 82.4%に上っている。幼稚部から小学部にかけては、連携有りで高い傾向が示されるが、中学部では連携有りとなしの割合がほとんど同程度になっている。高等部普通科と専攻科においては、連携なしの割合が高い。医療機関との連携は、概ね半数以上の幼児児童生徒の学部において連携が取られていること、その実態は、幼小中を中心にしながら、年齢の上昇に伴い、その割合が減っている様子がうかがえた。

表 7-5 連携有無の頻度

連携有無/各部	幼稚部	小学部	中学部	高等部	専攻科	計
人数 (%)	312 (100)	478(100)	245(100)	267(100)	42(100)	1,350(100)
連携あり	217 (82.4)	266(55.6)	121(49.4)	67(25.2)	3(7.1)	719(53.7)
連携なし	49 (15.7)	187(39.1)	115(46.9)	196(73.7)	39(92.9)	588(43.6)
無回答	6 (1.9)	25(5.2)	9(3.7)	3(1.1)	0(0)	43(3.1)

(2) 医療機関との連携の内容

医療機関との連携の内容を表 7-7 に示す。

連携内容のほとんどが人工内耳装用児に関する情報共有の内容であった。定期診察やマッピングの際に教員が対象児の保護者と一緒に医療機関等を訪ね、必要な情報の提供ややりとりを行うケースもその次に多く見られた。

表 7-7 医療機関との連携の内容

(件)

1. 情報共有 (599)
情報交換 (131)、ケース会議・カンファレンス・情報交流会・両親講座 (169)、
連絡ノート・ノート・連絡票・校内担当者や ST を通して (112)、保護者を通して (187)
2. 定期診察やマッピング (130)
3. 医師・ST・OT の学校訪問や視察 (43)
4. 医師・ST 等による指導・校内研修会 (検討会) の開催 (17)
5. 医療機関の研修会に参加 (4)
6. その他 (8)

4. 人工内耳幼児児童生徒の指導について

補聴器装用児との指導上違いに着目し、次の 3 つの点について調べた。

1) 指導上の課題

指導上の課題について表 7-8 に示す。

表 7-8 指導上の課題

(件)

1. 補聴器装用児と変わらない (31)
2. 言語の問題 (177)
・言語力 (73) ・言語発達 (46) ・教科学習 (26) ・言語理解 (18) ・語彙 (14)
3. 聴覚活用とコミュニケーション上の問題 (344)
・コミュニケーション (109) ・言語音の聴取、聞き取り (94) ・発音発語指導 (46) ・聴覚活用 (61)
・傾聴態度 (34)
4. 障害認識、障害受容、自己認識の問題 (66)
5. 機器管理上の問題
・装用習慣 (37) ・運動時の配慮を含む安全管理 (16) 自他腕の活用法 (6) ・声量や他の機器との関係 (3)
6. 指導や支援上の問題 (85)
・基礎知識 (51) ・保護者支援 (23) ・聞こえの実態把握や評価 (19) ・効果的指導法 (11)
7. 視覚的支援の問題 (32)
・手話の活用 (23) ・視覚的情報への意識の欠如 (9)
8. その他 (151)
・行動上の制約の存在、音過敏、人工内耳装用者のモデル不足、頭痛、最適な大きさの音の提示、個人差の大きさ
9. 特になし (89)

聞き取りと言語力に関する課題が多く示されている。音としての知覚には優れているものの、言語力、認知力、経験の不足から来る言語理解力の不十分さが指摘できる。特にないという指摘も比較的多く見られた。

(2) 指導上の工夫点

指導上の工夫について、表 7-9 に示す。聴覚活用やコミュニケーション上の工夫が多く見られており、人工内耳による聴覚活用が補聴器より活発である可能性を示唆するものとなっている。補聴器装用児への指導と変わらないという回答も多く見られている。

表 7-9 指導上の工夫 (件)

1. 補聴器装用児と変わらない、特になし (171)
2. 言語に係わる工夫 (245)
・視覚的教材や情報の活用と配慮 (93) ・言語力の指導 (58) ・手話の活用 (36) ・言語理解の確認 (32)
・教科学習 (15) ・多様なコミュニケーション手段の活用 (11)
3. 聴覚活用とコミュニケーション上の工夫 (430)
・聴覚活用 (178) ・コミュニケーション (97) ・発音発語指導 (52) ・話しのかけ方等の工夫 (35)
・文字、指文字、キューサイン、口声模倣等の活用 (27) ・傾聴態度 (25) ・マナー (16)
・傾聴態度 (34)
4. 障害認識、障害受容 (8)
5. 機器管理上の工夫 (45)
・衝撃への対応 (16) ・管理知識 (12) ・機器使用に関する工夫等のアドバイス (9) ・運動時の配慮 (7)
・装用の確認 (1)
6. その他 (56)

(3) 指導しやすい点

表 7-10 に、補聴器装用児に比べて、人工内耳装用児に対する指導上のしやすさを尋ねたところ、聴覚活用とコミュニケーションの面において大きなメリットがあることが示唆された。音の知覚はもちろんであるが、言語発達にも肯定的な影響を及ぼすと認識する割合が高かった。

表 7-10 指導しやすい点 (件)

1. 補聴器装用児と変わらない、特になし (176)
2. 言語の面 (136)
・語彙力が高い (51) ・言語力の育成が容易 (34) ・言語発達が良好 (30) ・教科学習のメリット (16)
・注意力・思考力の良好 (5)
3. 聴覚活用とコミュニケーション上の工夫 (593)
・聴覚活用 (292) ・コミュニケーション (116) ・音への反応、きづき、聞き取りの良さ (115)
・発音発語指導のしやすさ (43) ・発音が良好 (23) ・傾聴態度が良い (4)
4. 機器管理のしやすさ (21)
5. その他 (22)

5. 対象幼児児童生徒について

1) 聴覚障害診断時の年齢について

全体として、図 7-1 に示すとおり、1 歳未満（0 歳）44.1%と 1 歳 17.9%を合わせ 62%の幼児児童生徒が概ね 1 歳までに診断を受けていた。全体の受診時期の平均値も 1.06 歳を示しており、1 歳までに診断を受ける様子が確認できた。特に、幼稚部においては 1 歳未満 68.6%、1 歳 12.8%と合わせて 81.4%の幼児が 1 歳までの診断を受けており、新生児聴覚スクリーニング検査の受診率 8 割以上（文科省，2019）の実績に裏付けられた状況がうかがえた。なお、2 歳（8.8%）と 3 歳（4.4%）の診断率も合わせて 13.2%であり、このような傾向は、幼稚部から専攻科まで示されることから、軽度難聴や他の障害との重複障害の現状を反映しているものと思われる。

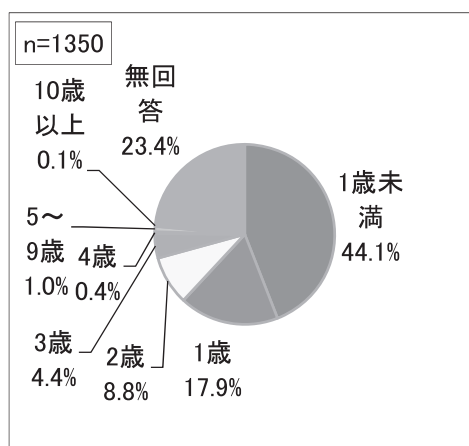


図 7-1 診断時の年齢（全体）

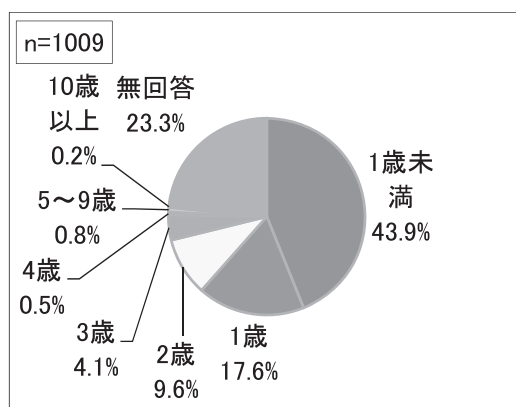


図 7-2 診断時の年齢（重複障害なし）

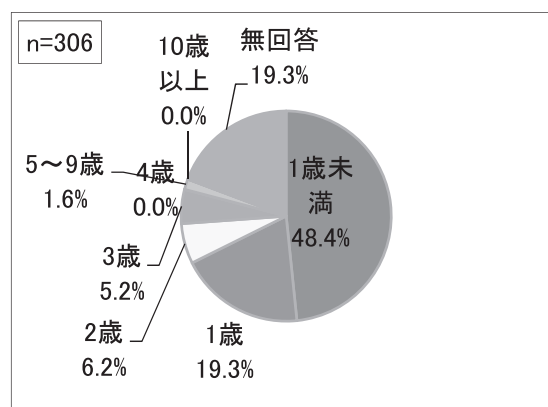


図 7-3 診断時の年齢（重複障害あり）

他の障害の有無においては、図 7-2 と図 7-3 に示すように、重複障害のある幼児の 1 歳台の診断率 67.7%となっており、重複障害なしの幼児の 1 歳台の診断率 61.5%に比べて幾分高い数字が示されており、重複障害の検査や診断との関連から診断が早まることも考えられる。しかし、障害の有無にかかわらず、平均診断年齢はいずれも 1 歳台前半を示していた。

2) 人工内耳装用状態

(1) 人工内耳装用状態

人工内耳の装用状態を図 7-4 に示す。右の片耳装用が最も多く、両耳と左の片耳は同程度であった。

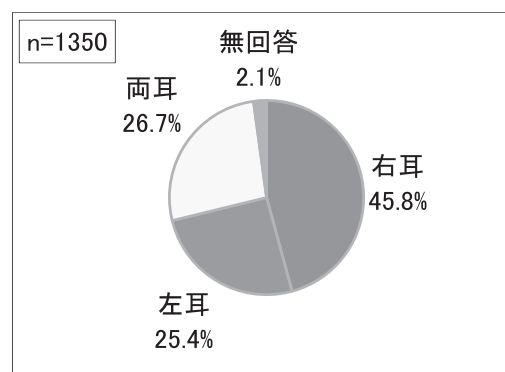


図 7-4 人工内耳装用状態（全体）

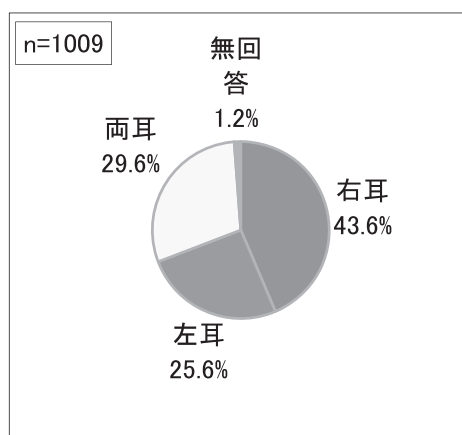


図 7-5 人工内耳装用状態（重複障害なし）

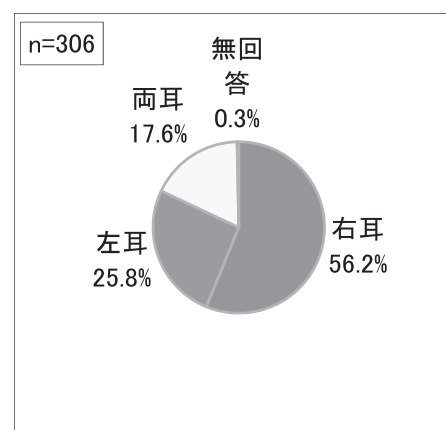


図 7-6 人工内耳装用状態（重複障害あり）

障害の有無別に見た状態の差は、図 7-5 と図 7-6 に示すとおり、重複障害ありにおいて右の片耳装用が多く、両耳装用が比較的少ない傾向が見られた。重複障害なしの場合は、両耳装用が特に多く、聴覚を積極的に活用するための現状があると考えられた。

(2) 片耳人工内耳装用における補聴器装用状態

全体として、片耳人工内耳装用におけるもう一方の耳の補聴器装用は、52.8%が装用、21.8%が未装用という現状が示された。重複障害の有無によっては、未装用の割合は 20%台重複障害の

有無による相違は見られないが、重複障害ありの方が、もう一方の耳への補聴器装用率が10%程度高く示された。重複障害を少しでも補う方策として考えられた。

(3) 学校での補聴援助システム使用の有無

全体として、学校での援助システムの使用は41.3%、不使用は58.7%を示した。重複障害有無によっては、重複障害なしではこの傾向は変わらないが、重複障害がある場合は、使用する割合が37.6%、不使用が62.4%になっている。在籍学級や個人の特性によるところが多きいと思われるが、重複障害ありにおける補聴システムのみ使用率の高さについては今後検討を要する。

3) 人工内耳装用開始時期

対象幼児児童生徒全体における人工内耳装用開始時期を、図7-7に示す。累計割合として、1歳台までが18.6%、2歳台までが43.7%、3歳台までが61.8%、4歳台まで71.1%、10歳までが80.2%となっており、3歳台までで6割以上、4歳台まで7割以上が装用する状況が見られた。

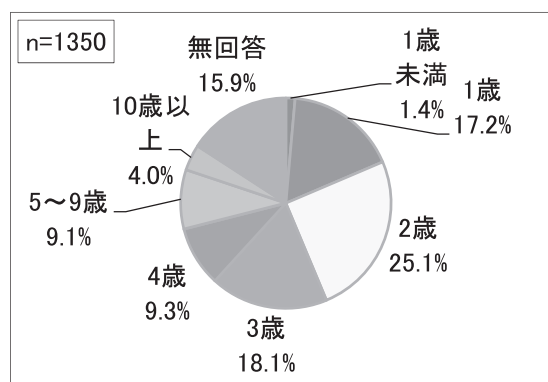


図7-7 人工内耳装用時期（全体）

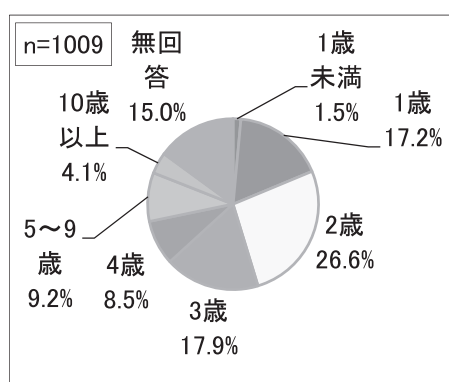


図7-8 人工内耳装用時期（重複障害なし）

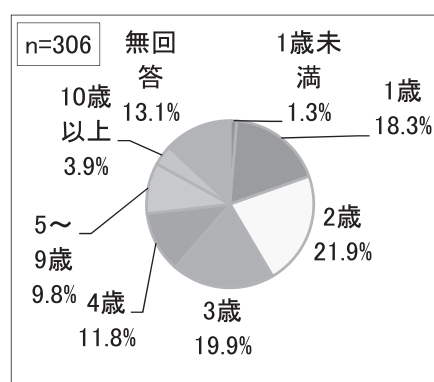


図7-9 人工内耳装用時期（重複障害あり）

図7-8と図7-9に示すように、障害の有無による人工内耳装用時期の差はほとんどなく、全体の傾向と同様であった。

4) 人工内耳手術前と装用下での平均聴力レベル

人工内耳装用前の両側耳（裸耳）と人工内耳装用後の両側耳（装用下）の平均聴力レベルを、表 7-11 に示す。いずれの幼児児童生徒においても、手術前は 100dB 以上の重度難聴であるが、人工内耳手術により、40dB 台の聴力レベルを保持することが示された。障害の有無による差は手術前後の平均聴力レベルを示している。人工内耳装用後も平均聴力レベルが 40dB 台を超えるケースも見られていることから、今後さらなる検討が必要と思われる。

表 7-11 手術前後の平均聴力レベル

対象	平均聴力レベル (dBHL)			
	左右耳	手術前 (裸耳)	装用後 (装用下)	補聴機器装 用なしの耳
全体	右耳	108.1	39.9	106.8
	左耳	107.3	43.4	
重複障害なし	右耳	107.2	38.9	106.2
	左耳	106.9	41.5	
重複障害あり	右耳	111.0	43.0	108.4
	左耳	108.7	49.8	

5) 重複障害の有無とその種類

対象幼児児童生徒のうち、重複障害があると答えた幼稚部 49 名、小学部 118 名、中学部 74 名、高等部 60 名、専攻科 5 名の計 306 名の重複障害の内容（障害種別）を図 7-8 に示す。全体的に、知的障害との重複障害の割合が 70.6%と高く、他の障害の割合は 10%未満である。回答の中で、その他の割合が 32.7%もあり、幼稚部 17 名、小学部 30 名、中学部 24 名、高等部本科 14 名、高等部専攻科 2 名であった。記述内容から、ほとんどが発達障害と考えられる。

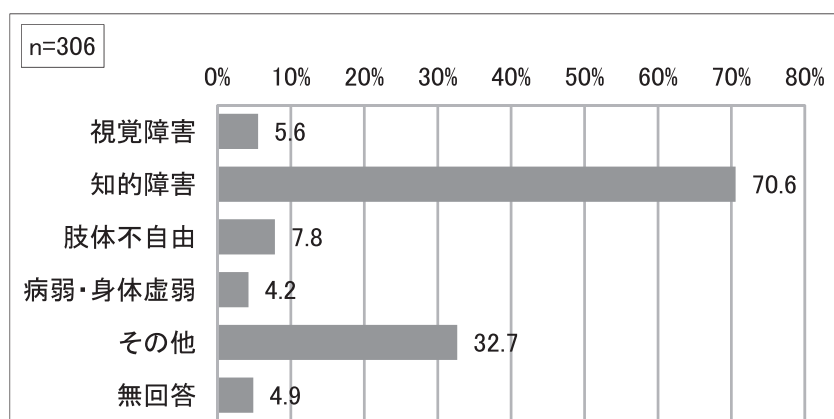


図 7-8 重複障害種の内訳

6) 使用しているコミュニケーション・モード

(1) 普段使用しているコミュニケーション・モード

全体的にコミュニケーション・モードは、図 7-9 に示すとおり、音声、手話、指文字が多く使われていることが確認できた。また、図 7-10 と図 7-11 に示すとおり、重複障害有無によっては、重複障害の有無にかかわらず、音声、手話、指文字が多用される傾向は変わらないものの、重複障害なしの対象は重複障害ありの対象に比べて、音声の活用率が高いこと、逆に、重複障害ありの対象は重複障害なしの対象に比べて、手話の使用頻度が高いことが示された。

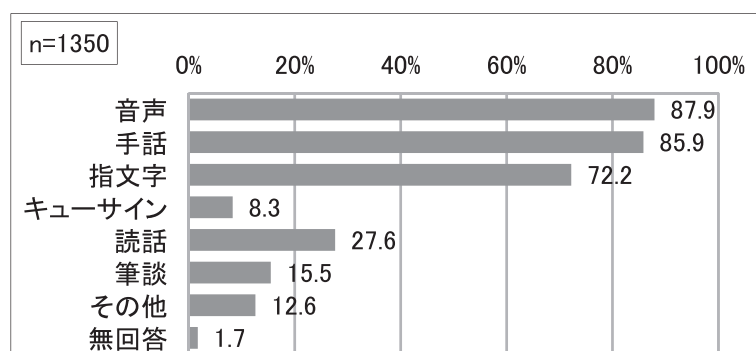


図 7-9 普段使用しているコミュニケーション・モード（全体）

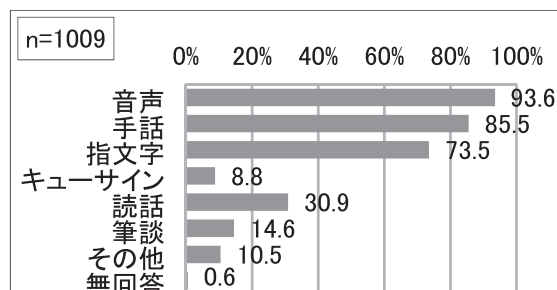


図 7-10 普段使用している CC モード（重複障害なし）

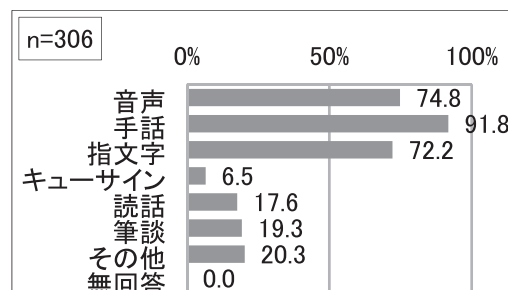


図 7-11 普段使用している CC モード（重複障害あり）

(2) 学習時に主に使用するコミュニケーションモード

学習時に主に使用するコミュニケーション・モードについて、最も使用するモード（1 番目）とその次に多く使用するモード（2 番目）の 2 つを調べた。

全体的には、図 7-12 と図 7-13 に示すとおり、普段多く使用するコミュニケーション・モードを反映しており、第 1 番目に音声 57.4%、手話 34.5%であった、第 2 番目では、手話 44.8%、音声 20.1%、指文字 16.7%であった。このことから、第 1 番目に音声を使用する人は、第 2 番目に手話や指文字またはその両方を使用する傾向が強く、第 1 番目に手話を使用する人は、第 2 番目に音声か指文字またはその両方を使用する傾向が強いことが示された。

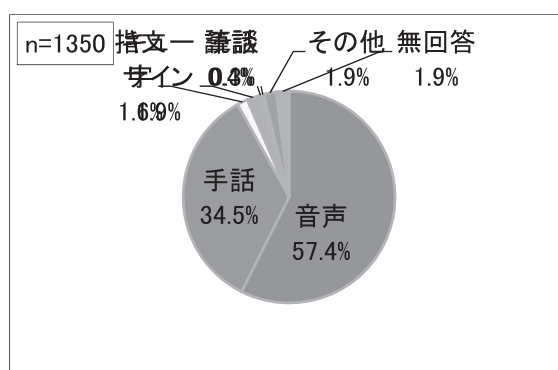


図 7-12 学習時の CC モード（1 番目：全体）

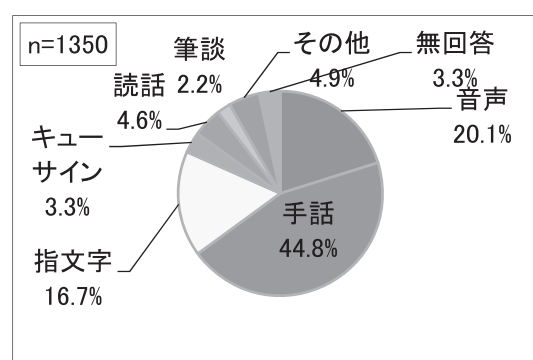


図 7-13 学習時の CC モード（2 番目：全体）

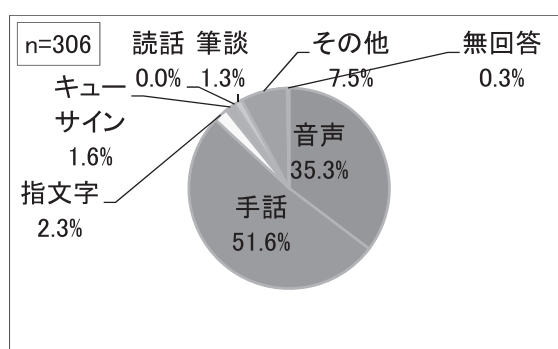


図 7-14 学習時の CC モード（1 番目：重複障害あり）

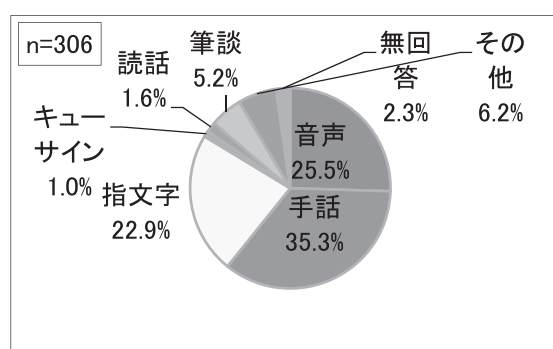


図 7-15 学習時の CC モード（2 番目：重複障害あり）

また、重複障害の有無による検討では、図 7-14 と図 7-15 に示すように、重複障害がない場合、第 1 番目に音声 65.4%、手話 29.7%を、第 2 番目に手話 48.5%、音声 18.9%、指文字 14.8%の順に使用していた。このことから、重複障害がない対象においては、第 1 番目に音声を使用する人は、2 番目に手話や指文字またはその併用を、1 番目に手話を使用する人は、2 番目に音声や指文字またはその併用の可能性が高いことが示され、全体的な活用傾向と同様であった。しかしながら、重複障害ありの対象では、1 番目に手話 51.6%、音声 35.3%、第 2 番目に、手話 35.3%、音声 25.5%、指文字 22.9%の順であった。このことから、重複障害のある人において、第 1 番目に手話を使用する人は、2 番目に音声指文字またはその組み合わせを、第 1 番目に音声を使用する人は、2 番目に手話と指文字またはその組み合わせを使用する傾向が強いことが示唆された。

7) 家族構成

家族構成は、きょうだいの有無と聴覚障害近親者の有無について調べた。

全体的に、約 70%の幼児児童生徒にきょうだいがいること、聴覚障害近親者は 15%程度であることが示された。

重複障害の有無による分析では、重複障害なしの対象が、きょうだいの割合が高く、聴覚障害近親者の割合も若干高い可能性があるが、障害の有無に関係なく、いずれの対象においても、70%以上きょうだいがあり、聴覚障害近親者も、通常の出現頻度内の割合を示していた。

8) 学校歴（現在まで）

学校歴に関しては、それぞれの学部を含む学校歴について、複数回答が可能な形式で調べた。対象となった幼児児童生徒は、現状として特別支援学校の各学部にて在籍する対象であり、全体的に、学部が上がるにつれて、特別支援学校に在籍する割合は高くなっていった。

全体として、表 7-12 に示すとおり、乳児期に特別支援学校の教育相談に通っていた割合は 62.5%、幼稚園の在籍した割合は 74.1%、小学部在籍は 83.0%、中学部は 88.5%、高等部と専攻科は 97.4%であった。

重複障害の有無により、大きな変化はないものの、表 7-13 と表 7-14 に示す通り、重複障害ありの場合は、乳幼児期における支援・教育組織との連携は、重複障害なしの乳幼児に比べて、特別支援学校に限らず、行われていることが示唆された。

表 7-12 学校歴（全体）

	全体	対象	幼	小	中	高	専	計	%
1	<乳児期>特別支援学校（聴覚障害）	1252	242	264	128	131	17	782	62.5
2	<乳児期>児童発達支援センター（聴覚幼児通園施設）		66	89	60	52	2	269	21.5
3	<乳児期>その他		73	66	32	27	3	201	16.1
4	<幼児期>特別支援学校（聴覚障害）幼稚園	1518	299	403	201	194	28	1125	74.1
5	<幼児期>幼稚園		4	38	21	23	4	90	5.9
6	<幼児期>保育所		45	38	25	28	4	140	9.2
7	<幼児期>児童発達支援センター（聴覚幼児通園施設）		17	39	21	31	1	109	7.2
8	<幼児期>その他	1072	16	22	6	7	3	54	3.6
9	<児童期>特別支援学校（聴覚障害）小学部			452	221	189	28	890	83.0
10	<児童期>小学校（通常学級）			7	16	53	9	85	7.9
11	<児童期>小学校（特別支援学級）			9	23	39	3	74	6.9
12	<児童期>その他	563		12	9	0	2	23	2.1
13	<少年期>特別支援学校（聴覚障害）中学部				242	224	32	498	88.5
14	<少年期>中学校（通常学級）				2	26	6	34	6.0
15	<少年期>中学校（特別支援学級）				3	21	2	26	4.6
16	<少年期>その他	303			1	1	3	5	0.9
17	<青年期>特別支援学校（聴覚障害）高等部					260	35	295	97.4
18	<青年期>高等学校					1	5	6	2.0
19	<青年期>その他					0	2	2	0.7
	無回答	36						36	100.0

表 7-13 学校歴（重複あり）

	重複あり	対象	幼	小	中	高	専	計	%
1	<乳児期>特別支援学校（聴覚障害）	293	39	61	36	28	3	167	57.0
2	<乳児期>児童発達支援センター（聴覚幼児通園施設）		15	27	17	13	0	72	24.6
3	<乳児期>その他		18	17	11	8	0	54	18.4
4	<幼児期>特別支援学校（聴覚障害）幼稚園	366	49	96	60	47	3	255	69.7
5	<幼児期>幼稚園		1	5	4	8	2	20	5.5
6	<幼児期>保育所		9	12	5	5	0	31	8.5
7	<幼児期>児童発達支援センター（聴覚幼児通園施設）		5	12	10	8	0	35	9.6
8	<幼児期>その他	264	7	11	3	3	1	25	6.8
9	<児童期>特別支援学校（聴覚障害）小学部			108	69	49	4	230	87.1
10	<児童期>小学校（通常学級）			0	2	8	1	11	4.2
11	<児童期>小学校（特別支援学級）			5	4	6	0	15	5.7
12	<児童期>その他	143		4	4	0	0	8	3.0
13	<少年期>特別支援学校（聴覚障害）中学部				72	56	4	132	92.3
14	<少年期>中学校（通常学級）				0	2	1	3	2.1
15	<少年期>中学校（特別支援学級）				1	5	0	6	4.2
16	<少年期>その他	65			1	0	1	2	1.4
17	<青年期>特別支援学校（聴覚障害）高等部					60	3	63	96.9
18	<青年期>高等学校					0	0	0	0.0
19	<青年期>その他					0	2	2	3.1
	無回答	35						35	100.0

表 7-14 学校歴（重複なし）

	重複なし	対象	幼	小	中	高	専	計	%
1	<乳児期>特別支援学校（聴覚障害）	947	203	198	90	102	14	607	64.1
2	<乳児期>児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）		51	60	42	38	2	193	20.4
3	<乳児期>その他		55	49	21	19	3	147	15.5
4	<幼児期>特別支援学校（聴覚障害）幼稚部		250	299	138	144	25	856	75.5
5	<幼児期>幼稚園	1134	3	32	17	15	2	69	6.1
6	<幼児期>保育所		36	25	20	23	4	108	9.5
7	<幼児期>児童発達支援センター（難聴幼児通園施設）		12	26	11	23	1	73	6.4
8	<幼児期>その他		9	10	3	4	2	28	2.5
9	<児童期>特別支援学校（聴覚障害）小学部	800		337	149	136	24	646	80.8
10	<児童期>小学校（通常学級）			7	14	45	8	74	9.3
11	<児童期>小学校（特別支援学級）			4	18	32	3	57	7.1
12	<児童期>その他			7	5	9	2	23	2.9
13	<少年期>特別支援学校（聴覚障害）中学部	433			188	163	28	379	87.5
14	<少年期>中学校（通常学級）				2	24	5	31	7.2
15	<少年期>中学校（特別支援学級）				2	16	2	20	4.6
16	<少年期>その他				0	1	2	3	0.7
17	<青年期>特別支援学校（聴覚障害）高等部	233				195	32	227	97.4
18	<青年期>高等学校					1	5	6	2.6
19	<青年期>その他					0	0	0	0.0
	無回答	1						1	100.0

9) 今後の進路

今後の進路に関しては、表 7-15 のとおり、全体的に、乳幼児教育相談と幼稚部から小学部への進路希望が約 69%、小学部から中学部へは 80%、中学部から高等部へは 73.3%、高等部と専攻科からは、大学等への進学が 44.8%、就職が 55.3%であった。

表 7-15 今後の進路（全体）

		回答数	%
	全体	1350	%
1	<小学校>特別支援学校（聴覚障害）小学部	349	69.1
2	<小学校>小学校（通常学級）	73	14.5
3	<小学校>小学校（特別支援学級）	48	9.5
4	<小学校>その他	35	6.9
	小学校 計	505	100.0
5	<中学校>特別支援学校（聴覚障害）中学部	349	79.9
6	<中学校>中学校（通常学級）	31	7.1
7	<中学校>中学校（特別支援学級）	11	2.5
8	<中学校>その他	46	10.5
	中学校 計	437	100.0
9	<高等学校>特別支援学校（聴覚障害）高等部	407	73.3
10	<高等学校>高等学校	80	14.4
11	<高等学校>その他	68	12.3
	高等学校 計	555	100.0
12	<大学等>特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	72	9.1
13	<大学等>高等専門学校	15	1.9
14	<大学等>筑波技術大学	45	5.7
15	<大学等>一般大学	120	15.2
16	<大学等>その他	102	12.9
17	<就職・その他>就職	344	43.5
18	<就職・その他>職業能力開発校	4	0.5
19	<就職・その他>その他	89	11.3
	大学・専攻科 計	791	100.0
	無回答	136	10.1

大学等への進学の内訳は、一般大学が 15.2%、その他の大学が 12.9%、筑波技術大学 5.7%、高等専門学校 1.9%、特別支援学校専攻科 9.1%の順であった。就職等の進路は、一般会社等への就職が 43.5%、その他の就職 0.5%、職業能力開発校 0.5%の順であった。

重複障害の有無による今後の進路は、表 7-16 と 7-17 に示すように、重複障害なしが小学部から高等部に至るまで、特別支援学校（聴覚障害）を希望する割合は 70-80%であり、通常の小中高等学校への進学希望が 20-30%あるのに対して、重複障害ありの場合は、特別支援学校（聴覚障害）への進学希望は、小中高等部に至るまで、常に 80%以上、通常の小中高等学校への進学希望は 20%未満という違いが示された。高等部あるいは高等学校からの進路にも差が見られ、重複障害なしの場合は、大学等への進学が 48.6%、就職等が 51.4%に対して、重複障害ありは、大学等への進学は 25%、就職等への希望が 75%を示した。

表 7-16 今後の進路（重複障害なし）

		回答数	%
	重複なし	1009	
1	<小学校>特別支援学校（聴覚障害）小学部	276	66.7
2	<小学校>小学校（通常学級）	72	17.4
3	<小学校>小学校（特別支援学級）	45	10.9
4	<小学校>その他	21	5.1
		414	100.0
5	<中学校>特別支援学校（聴覚障害）中学部	259	77.8
6	<中学校>中学校（通常学級）	30	9.0
7	<中学校>中学校（特別支援学級）	11	3.3
8	<中学校>その他	33	9.9
		333	100.0
9	<高等学校>特別支援学校（聴覚障害）高等部	296	71.5
10	<高等学校>高等学校	74	17.9
11	<高等学校>その他	44	10.6
		414	100.0
12	<大学等>特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	58	9.3
13	<大学等>高等専門学校	14	2.3
14	<大学等>筑波技術大学	40	6.4
15	<大学等>一般大学	112	18.0
16	<大学等>その他	85	13.7
17	<就職・その他>就職	260	41.8
18	<就職・その他>職業能力開発校	2	0.3
19	<就職・その他>その他	51	8.2
		622	100.0
	無回答	84	8.3

表 7-17 今後の進路（重複障害あり）

		回答数	%
	重複あり	306	
1	<小学校>特別支援学校（聴覚障害）小学部	71	80.7
2	<小学校>小学校（通常学級）	1	1.1
3	<小学校>小学校（特別支援学級）	2	2.3
4	<小学校>その他	14	15.9
		88	100.0
5	<中学校>特別支援学校（聴覚障害）中学部	85	87.6
6	<中学校>中学校（通常学級）	0	0.0
7	<中学校>中学校（特別支援学級）	0	0.0
8	<中学校>その他	12	12.4
		97	100.0
9	<高等学校>特別支援学校（聴覚障害）高等部	108	79.4
10	<高等学校>高等学校	6	4.4
11	<高等学校>その他	22	16.2
		136	100.0
12	<大学等>特別支援学校（聴覚障害）高等部専攻科	13	8.2
13	<大学等>高等専門学校	1	0.6
14	<大学等>筑波技術大学	4	2.5
15	<大学等>一般大学	5	3.1
16	<大学等>その他	16	10.1
17	<就職・その他>就職	81	50.9
18	<就職・その他>職業能力開発校	2	1.3
19	<就職・その他>その他	37	23.3
		159	100.0
	無回答	33	10.8

10) 聴覚活用の状態

(1) 聴覚活用の状態の評価について

聴覚活用の状態は、①音への気づき、②言語音の聞き取り、③傾聴態度の側面から、それぞれについて 5 段階で評価を行った。その結果を表 7-18 に示した。

表 7-18 聴覚活用の状態

		極めて良い (5点)	良い(4点)	どちらともい えない(3点)	あまり良く ない(2点)	良くない (1点)	無回答	平均評定値
1) 音への気づき	全体	22.8	51.4	13.3	6.4	4.1		3.84
	重複障害なし	20.6	54.3	11.8	4.8	2.7		3.97
	重複障害あり	13.7	44.8	19.6	12.4	8.8		3.42
2) 言語音の聞き取り	全体	10.3	42.1	23	12.7	9.2	2.7	3.33
	重複障害なし	12.8	46.1	22.4	11	6.2		3.49
	重複障害あり	2.9	31.4	26.5	19	19.3		2.8
3) 傾聴態度	全体	14.4	38.1	23.7	16.1	5	2.7	3.42
	重複障害なし	17.9	41.6	22.6	13.2	3.1		3.59
	重複障害あり	3.9	29.1	28.8	25.8	11.4		2.88

音への気づきは、全体的に 74.2%が良い評価であったが、10.5%が良くない評価であった。

重複障害なしでは、74.9%が良い、7.5%が良くない評価、重複障害ありでは、58.5%が良い、21.2%が良くない評価であった。音への気づきを単なる音の受容ではなく、音に対する基礎的な認知作用として考えると、主に知的な障害によるこの段階からの認知作用から、その違いが見られるといえよう。

言語音の聞き取りは、全体的に 52.4%が良い評価であったが、21.9%が良くない評価であった。

重複障害なしでは、58.9%が良い、17.2%が良くない評価、重複障害ありでは、34.3%が良い、38.3%が良くない評価であった。言語音の聞き取りは、音の聴取のみならず、言語力に基づく理解が必要であることから、学部段階別の検証が必要であるが、重複障害なしの場合も良くない割合が 17.2%に上っており、重複障害ありの場合は、38.3%に至ることから、言語力などとの関連によるものと思われる。

傾聴態度は、全体的に 52.5%が良い評価であったが、21.1%が良くない評価であった。

重複障害なしでは、59.5%が良い、16.3%が良くない評価、重複障害ありでは、33%が良い、37.2%が良くない評価であった。この傾聴態度の割合と言語音の聞き取りとの割合が近似しており、今後、両方の関連について調べる必要があると思われる。

(2) 聴覚活用に関する指導の現状と課題

幼稚部における指導の現状課題につて、図 7-16 に示した。幼稚部では、語彙の指導、文による表現力の指導、視覚的教材を用いた指導などの従来の指導内容が示された。障害の有無による課題の違いは大きく示されていない。

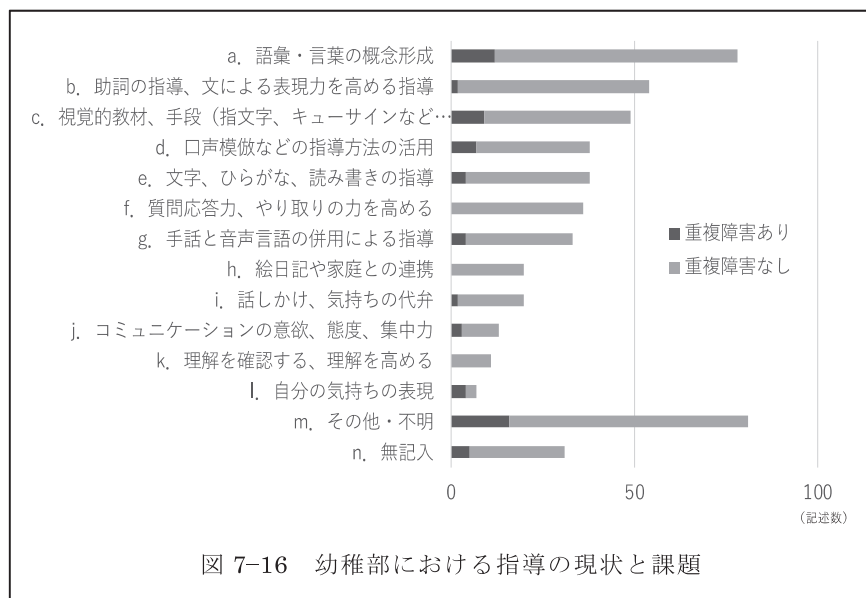


図 7-16 幼稚部における指導の現状と課題

小学部では、言語指導における聴覚活用の程度について、重複障害なしの児童の場合、全体 211 件の内、190 件（約 90%）が活用できていること、21 件（約 10%）が活用できていないこと、重複障害ありの児童の場合、全体 70 件の内、活用できている児童が 63 件（約 90%）、出来てい

ない児童が 7 件（約 10%）であり、重複障害の有無にかかわらず、聴覚活用が行われている実態が示された。小学部における課題として、ことばや文の聞き取りの困難、傾聴態度の問題、学年相応の語彙力・文法力、障害理解、集中力の欠如などが指摘されている。

中学部においては、重複障害の有無に関係なく、ことばや文の聞き取りの困難、聞き漏らし・聞き誤り、注意力・集中力の欠如、障害理解・障害認識の不足、対人コミュニケーションの問題、発音の不明瞭さなどが多く指摘されている。

高等部においては、傾聴態度、聴覚活用、日本語獲得、人工内耳の管理、手話の活用などの課題が指摘されている。

11) 言語活動

幼児児童生徒の言語力(幼稚部は口頭による言語活動、他の学部は読み書き)について、同年齢の健聴の幼児児童生徒の平均値に比べた①文法力、②文章理解力、③作文力、④文章構成力について、それぞれ 5 段階の評価を行った。その結果を表 7-19 に示す。

表 7-19 言語活動（読み書き力）

		高い (5点)	やや高い (4点)	同じくらい (3点)	やや低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
1) 文法力	全体	2	4.3	16.5	30.3	43.9	3	1.87
	重複障害なし	2.5	5.6	20.5	32.9	37.2		2.02
	重複障害あり	0.7	0.3	4.2	23.2	68.3	3.3	3.42
2) 文章理解力	全体	2.4	4.9	17.3	30.4	42	3	1.92
	重複障害なし	3	6.4	21.2	33.4	34.7		2.08
	重複障害あり	1	0.3	5.2	21.9	68.3	3.3	2.8
3) 作文力	全体	1.9	3.3	18.6	27.9	43.4	4.9	1.87
	重複障害なし	2.3	4.5	22.9	30.8	36.1	3.5	2.03
	重複障害あり	0.7	0	4.2	20.3	70.6	4.2	2.88
4) 文章構成力	全体	1.1	3.6	14.1	29.6	47	4.6	1.77
	重複障害なし	1.3	4.4	18.1	33.6	39.5	3.2	1.91
	重複障害あり	0.7	1.3	1.6	18.6	73.5	4.2	1.3

全体的に、いずれの言語力においても、健聴の幼児児童生徒に比べて、平均同等以上は 20～30%程度、低いのは 70～80%程度であった。重複障害なしの場合は、概ね全体の傾向を裏付けていたが、重複ありの場合は、健聴の幼児児童生徒に比べて、平均同様以上は 4-7%程度に留まっており、低いのが 90%以上を占めていた。言語力には、重複障害の影響が強く反映されていること、重複なしの幼児児童生徒の場合も、全般的に言語力が低いレベルに留まっているといえる。

(1) 言語活動（読み書き）に関する指導の現状と課題

表 7-20 に、重複障害有無別の言語活動（読み書き）に関する指導の内容と課題について示した。言語力（読み）と書きの項目で示されるように、言語指導に関しては日本語の読み書きを中心に展開されていることがうかがえる。聴覚活用の項目に示されるように、読み書きの言語活動の他に、聞く、話すといった言語活動も同時に活用している様子がうかがえる。

表 7-20 言語活動（読み書き）における課題

(件)

重複障害なし	重複障害あり
1. 言語力 (514) ・語彙（敬語）(184)・言語力（148）・文法（助詞）(107) ・ことばによる表現（40）・文理解（17）・読む（18）	1. 言語力 (130) ・語彙（敬語）(67)・言語力（148）・読む（23）
2. 聴覚活用 (70) ・音韻（19）・聞く（16）・話す（18） ・ことばの聞き取り（11）・発音の不明瞭さ（5） ・聞き漏らし・聞き誤り（1）	2. 聴覚活用 (64) ・ことばの聞き取り（32）・聞き漏らし、聞き誤り（17） ・発音の不明瞭さ（10）・話す（3）・聞く（2）
3. 書き (126) ・話しことばと書き言葉の結びつき（24） ・書くことの苦手さ（50）・書く（52）	3. 書き (51) ・話しことばと書き言葉の結びつき（20） ・書く（31）
4. 言語的刺激に活用・言語態度 (39) ・言語学習への意欲（21）・手話の活用（18）	4. 言語的刺激に活用・言語態度 (16) ・手話の活用（14） ・視覚的情報の活用（2）
5. 認知力 (42) ・思考力（33）・注意力、集中力（9）	5. 認知力 (10) ・注意力、集中力（2） ・対人コミュニケーション能力（8）
6. 障害認識 (0)	6. 障害認識 (6)
7. 全般的な遅れ (8)	7. 全般的な遅れ (16)
8. その他 (47) ・環境面での配慮等（47）	8. その他 (13) ・環境面での配慮等（4）・機器の操作（9）

5. 幼児児童生徒の学校での学習と生活

1) 学業成績について

学業成績については、「健聴児と比べた学業成績の程度」、「潜在力と比べた学業成績の程度」、「読書力の程度」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 3つの項目の評価結果について

学業成績に関する3つの項目の評価結果を、表 7-21 に示す。

全体的には、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、潜在的な学業の可能性は、6割以上が同等以上、1割強が低い評価に留まっている。重複障害ありの幼児児童生徒の場合も、6割弱がその可能性を認めている。しかし、学業成績の現状では、全体として5割以上が健聴の幼児児童生徒より低く、同等以上は2割強に留まっている。重複障害の存在により、このような傾向はさらに顕著である。読書力は、学業成績の現状を反映した結果となっている。なお、全体的に無回答の割合が2割と高い数値が示されている。評価しにくいという回答なのか、評価できないという回答なのか、今後検討する必要があると思われる。

表 7-21 学業成績の現状

学業成績		高い (5点)	少し高い (4点)	同じくらい (3点)	少し低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
1) 健聴児との比較	全体	1.7	4.4	16.4	24.8	28.9	23.8	2.02
	重複障害なし	2.2	5.6	20.4	26.8	20.7	24.4	2.23
	重複障害あり	0.3	0.7	4.2	18.6	57.5	18.6	1.37
学業成績		同じくらい (5点)	やや低い (4点)	低い (3点)	かなり低い (2点)	比較できないほど 低い(1点)	無回答	平均評定値
2) 個人の潜在能力との比較	全体	27.9	19.8	16.3	8.3	3.6	24.1	3.79
	重複障害なし	29	20.7	16.5	6.9	2	24.9	3.9
	重複障害あり	24.8	18	16.3	13.4	9.2	18.3	3.44
読書力		高い (5点)	少し高い (4点)	同じくらい (3点)	少し低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
3) 読書力の程度	全体	2	5	15	21.9	32.1	24	1.99
	重複障害なし	2.5	6.5	18.7	22.9	24.7	24.7	2.19
	重複障害あり	0.7	0.3	3.3	20.3	56.9	18.6	1.37

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学業成績に係わる総合評価を表 7-22 に示す。全体として 2 割の幼児児童生徒が学業成績の面において、健聴の幼児児童生徒と同様の評価を得ているものの、約 5～6 割の幼児児童生徒が、学業に関するサポートを必要としている結果が示されているといえる。なお、健聴の幼児児童生徒と同等以上の 2 割の幼児児童生徒も、特別支援学校での学習があつての現状であることを考慮する必要があると思われる。

表 7-22 学業成績の総合評価

学業成績（全体）	9 点以下	10 点以上	無回答	平均評定値
全体	54.7	20.6	22	8.11
重複障害なし	48.8	25.9	25.4	8.35
重複障害あり	76.5	4.2	19.3	6.18

学習の指導の現状と課題に関する記述の一部を以下に示す。

① 幼稚部

「重複障害あり」（4 件）

- ・生活面での指導が中心
- ・手話や指文字のまねによる学習
- ・視覚情報や実体験に基づく遊びや行事のイメージ作り
- ・集団遊びや主体的活動を増やす

「重複障害なし」（16 件）

- ・絵本読み
- ・学校生活の体験、傾聴態度の育成
- ・身近な大人との非言語的活動を含めてのコミュニケーション活動
- ・人工内耳装用への習慣化
- ・絵や音声コードによることばの学習
- ・語彙が不足、年齢相応の語彙力がない
- ・手話と音声の併用や視覚的刺激の活用による学習
- ・視覚的情報の併用が必要不可欠

② 小学部

「重複障害あり」(99 件)

- ・興味のある内容について、スケジュールボードなどにより、学習の順序を提示
- ・ことばの学習に困難を示しており、丁寧な指導が必要
- ・手話でわかることばが指文字ではわからない
- ・語彙力が不足、ことばの定着に時間がかかる
- ・手話、指文字、文字等の視覚的情報を活用しながら、強化・領域をあわせた指導
- ・視覚的教材を用いた語彙の拡充指導
- ・集中と持続が難しい
- ・物語の音読と劇化による言語指導
- ・体験学習を多く取り入れ、体験したことを学習に結びづける工夫
- ・暗記は得意だが、学習したことばを用いて思考することは難しい。
- ・自分の思いや要望を他人に伝えられるように練習
- ・記憶力が著しく低く、それを補うための教材等の工夫が必要

「重複障害なし」(213 件)

- ・音韻意識が未熟、書く課題が非常に困難
- ・計算問題は解けるが、文章題課題は難しい
- ・語彙力不足による学習上の困難さ
- ・文法力の弱さに起因する国語教科学習の難しさ
- ・学習内容の理解に時間が掛かる
- ・生活言語に比べて学習言語が不足
- ・学習した内容の定着に時間がかかる
- ・学習した内容はよく覚えているが、それを用いて活用するのは難しい
- ・読みを読む習慣の不足
- ・全般的に言語力が学年相応ではなく、幾分遅れている
- ・学習の手順やポイントをわかりやすいことばで繰り返し提示し、学習させる

③ 中学部

「重複障害あり」(58 件)

- ・基礎学力の定着
- ・言語力、語彙力
- ・学習意欲・学習習慣
- ・注意力・集中力
- ・書く力
- ・文章理解

「重複障害なし」(113 件)

- ・基礎学力の定着
- ・学習意欲・学習習慣の形成
- ・国語力、言語力全般
- ・文章読解、文章理解
- ・語彙力
- ・注意力、集中力
- ・思考の難しさ
- ・教科学習の不十分さによる学力の差

④ 高等部

「重複障害あり」(53 件)「重複障害なし」(128 件)

- ・日本語指導
- ・論理的抽象的思考力
- ・学習の定着、反復学習
- ・反復学習による言語の定着
- ・下学年指導
- ・視聴覚教材
- ・手話の活用

2) 学習態度について

学習態度については、「注意散漫の程度」、「注意持続時間の程度」、「口頭指示に対する反応」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 3つの項目の評価結果について

学習態度に関する3つの評価項目の結果を、表7-23に示す。全体的には、注意散漫の程度や注意持続時間の程度は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、5割は同等以上、5割は不十分さを指摘する結果となった。口頭指示に対する躊躇や戸惑いも、6割以上が同等以上、3割強が多い評価に留まっている。このような全体の傾向は、重複障害なしの幼児児童生徒においてはその割合がさらに高くなる傾向が示されるが、重複障害ありの幼児児童生徒の場合は、逆に、3割の幼児児童性が同等以上、6割以上が多い結果が示されている。重複障害ありの場合は、重複障害から来る学習態度上の問題があると思われるが、重複障害なしの場合の5割の不十分さについては原因をさらに追求する必要があると思われる。

表 7-23 学習態度の現状

注意散漫	ほとんどない (5点)	少しある (4点)	同じぐらい (3点)	少し多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	16	11.6	23.9	24.5	29.9	4.1	2.78
重複障害なし	18.9	12.5	27.7	24.6	13.8	2.6	2.98
重複障害あり	7.5	9.2	12.7	26.1	40.2	4.2	2.14
注意持続	長い (5点)	少し低い (4点)	同じくらい (3点)	少し短い (2点)	短い (1点)	無回答	平均評定値
全体	6.9	5.7	35.4	27.3	20.9	3.8	2.48
重複障害なし	8.4	6.5	41.2	27.2	14.4	2.3	2.67
重複障害あり	2.6	3.6	18	29.7	42.5	3.6	1.9
口答による指示の実行	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	6.4	17.6	36.3	20	15.8	3.9	2.78
重複障害なし	6.7	21.5	40.1	18.2	11.1	2.3	2.94
重複障害あり	5.9	6.5	24.5	26.5	32.7	3.9	2.23

②平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学業態度に関する総合評価を表7-24に示す。全体として半数近くの幼児児童生徒が学業態度の面において、健聴の幼児児童生徒と同様の評価を得ているものの、約半数の幼児児童生徒が、この面でのサポートを必要としている結果が示された。重複障害ありの幼児児童生徒においては7割以上が何らかのサポートを必要としていることが示された。

表 7-24 学習態度の総合評価

学習態度（全体）	8点以下	9点以上	無回答	平均評定値
全体	48.5	46.7	4.8	8.06
重複障害なし	42.3	54.6	3.1	8.6
重複障害あり	71.2	23.5	5.2	6.3

学習態度の指導の現状と課題に関する記述では、次のような代表的な内容が見られた。

① 幼稚部（195 件）

- ・指導の工夫
- ・注意力、持続力
- ・傾聴態度、学習行動
- ・言語力との関連
- ・精神的問題（安定感、意欲、興味など）
- ・集団適応
- ・他の障害との問題

② 小学部（224 件）

- ・言語的指示の理解に困難、視覚的手段の活用によるコミュニケーションの育成
- ・障害理解に問題があり、聞こえにくさに対する意識の欠如
- ・集中力が続かない
- ・わからないことに対するメタ認知が出来ていない
- ・ことばの理解はできるが、行動が伴わない
- ・話の内容や伝え方を工夫している
- ・興味がないことへの学習意欲が低い

③ 中学部（106 件）

- ・指導の工夫
- ・注意力、持続力
- ・言語力の不足
- ・学習行動
- ・学習意欲の低さ
- ・集団適応
- ・興味関心の狭さや偏り
- ・状況理解や見通しの困難
- ・学習内容の定着が難しい
- ・聞こえにくさに対する意識

⑤ 高等部（91 件）

- ・聞き取り
- ・理解
- ・集中力、注意力、思考力
- ・学習態度
- ・コミュニケーション
- ・状況理解や見通し
- ・視覚情報の活用
- ・授業展開の工夫
- ・手話の併用
- ・学習に向かう意欲の弱さ、モチベーションの課題

3) コミュニケーション能力

コミュニケーション能力については、「CC 能力の程度」、「語彙力の程度」、「口述能力の程度」の 3 つの内容について、5 段階の評価を行い、3 つの評価項目の合計点が平均以下の場合、幼児

児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

コミュニケーション能力に関する3つ項目の評価結果を、表7-25に示す。全体的には、コミュニケーション能力は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、4割弱は同等以上、6割弱は低さを指摘する結果となった。語彙力においては、同等以上が2割強に留まっており、7割以上が低さを指摘している。口述力においても、同等以上は35%程度に留まっており、6割以上が低さを指摘する結果となった。コミュニケーション能力が、語彙力や口述力に支えられている観点からすれば、コミュニケーション能力の低さは、語彙力や口述力の低さにその原因を帰することもできよう。このような全体の傾向は、重複障害なしの幼児児童生徒においてはその割合がさらに高くなる傾向が示されているが、重複障害ありの幼児児童生徒の場合は、逆に、1割の幼児児童生徒のみが同等以上、8割以上が低い結果が示されており、聴覚障害の上に他の障害との重複障害によるコミュニケーション能力への影響の大きさがうかがえる。語彙力は、重複障害ありの場合、9割以上が低く、重複障害なしの場合であっても、7割以上が低いことを指摘しており、聴覚障害におけるコミュニケーション能力の低さが示されている。

表7-25 コミュニケーション能力の現状

コミュニケーション能力		高い (5点)	やや高い (4点)	同じぐらい (3点)	やや低い (2点)	低い (1点)	無回答	平均評定値
1) コミュニケーション能力	全体	3.5	6.7	27.6	34.5	24.2	3.6	2.28
	重複障害なし	4.4	8.1	32.5	35.4	17.9	0	2.45
	重複障害あり	1	2	12.7	34	46.4	3.9	1.72
2) 語彙力	全体	1.8	5.3	15.1	29.8	44.8	3.2	1.86
	重複障害なし	2.3	6.7	19.2	31.8	38.6	0	2.01
	重複障害あり	0.3	1.3	2.9	23.9	68	3.6	1.36
3) 口述力	全体	2.7	8.4	24.8	31	29.1	3.9	2.22
	重複障害なし	3.2	10.4	30.3	314	22.5	2.2	2.39
	重複障害あり	1.6	2.3	8.5	31.4	52.3	3.9	1.64

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つのコミュニケーション能力に関する総合評価を表7-26に示す。

表7-26 コミュニケーション能力の総合評価

コミュニケーション能力 (全体)	10点以下	11点以上	無回答	平均評定値
全体	87.3	8.7	4.1	6.37
重複障害なし	86.6	11	2.4	6.86
重複障害あり	94.1	2	3.9	4.73

全体として、10%以下の幼児児童生徒のみがコミュニケーションの問題はなく、87%以上の幼児児童生徒がコミュニケーションの面におけるサポートを必要としている結果が示された。重複障害ありの幼児児童生徒においては94%の幼児児童生徒がサポートを必要としている現状が示された。

コミュニケーション能力の指導の現状と課題に関する記述では、次のような内容が見られた。

① 幼稚園（267 件）

- ・ことばの力を高めること
- ・やりとりや質問への応答力の育成
- ・手話など、多様なコミュニケーション手段の活用
- ・教師の仲介や声かけ、活動の工夫
- ・対人関係、共感性、思いの共有
- ・視覚的手かぎりの活用
- ・コミュニケーションへの意欲や積極性を育てる
- ・落ち着きや集中力を高める態度
- ・保護者との連携や保護者支援
- ・聴覚活用

② 小学部（378 件）

- ・語彙力が不十分
- ・文法力のなさ
- ・コミュニケーションの意欲の低さ
- ・相手を意識したコミュニケーションがとれていない
- ・友人関係は良好
- ・語彙・文法力の不足
- ・発音の曖昧さ
- ・感情表現が難しい
- ・興味関心の幅が狭い

③ 中学部（53 件）

- ・指示の理解の確認が必要
- ・提出物・宿題・忘れ物が多い
- ・言語力が不足し、うまく表現できない
- ・予定に応じた行動や順序立てた行動の実行が難しい
- ・家庭生活と生活習慣の不規則
- ・注意、集中力の欠如
- ・整理整頓ができない
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない
- ・障害認識、自己認識ができていない
- ・相手の心情理解にやや課題がある

④ 高等部（63 件）

- ・心理的不安定さ
- ・集団行動、社会性の問題
- ・自立心やセルフコンピテンスの欠如
- ・計画性のなさ
- ・学習や生活の態度
- ・コミュニケーションの課題
- ・個別指導が必要
- ・メモ、例示による確認
- ・ルール作り
- ・教職員の連携による対応
- ・発音が不明瞭、自信のないことばを更に小さく発音し、コミュニケーションの成立を妨げている
- ・自ら発信することに苦手意識
- ・自ら意志を主張することは少なく、積極的に関わろうとしない

4) 学校生活

学校生活については、「学習への参加状況」、「家庭課題への対応状況」、「指示に対する遂行能

力」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの評価項目の合計点が平均以下の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

学校生活の現状に関する3つの評価項目の結果を、表 7-27 に示す。

表 7-27 学校生活の現状

参加状況	多い (5点)	やや多い (4点)	同じくらい (3点)	やや少ない (2点)	少ない (1点)	無回答	平均評定値
全体	16.4	17.4	27.6	22.7	13.1	2.8	3.01
重複障害なし	18.7	20.2	29.5	21.9	8.4	1.2	3.19
重複障害あり	9.8	9.2	22.5	26.1	29.7	2.6	2.14
提出物の状況	常に提出 (5点)	ほとんど提出 (4点)	時々忘れる (3点)	ほとんど忘れる (2点)	常に忘れる (1点)	無回答	平均評定値
全体	26.4	30.2	28.2	8.7	2	4.4	3.74
重複障害なし	27.3	32.4	28.4	7.7	1.8	2.4	3.77
重複障害あり	26.5	24.5	28.4	12.4	2.6	5.6	3.63
指示後の遂行	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	7.2	25.6	37.8	18.3	8.4	2.7	3.05
重複障害なし	8.2	30.3	38.1	15.9	6.3	1.2	3.18
重複障害あり	4.6	11.8	38.2	27.1	16	2.3	2.61

全体的には、クラスでの話し合いへの参加状況の多少は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、同等以上が6割以上、4割弱は少なさを指摘している。提出物の状況についても、1割の幼児児童生徒が忘れることはあるものの、8割以上は良好であることが示された。また、指示後の課題遂行においても、7割以上が良好であることが示されている。重複障害ありの幼児児童生徒の場合も、4割以上が話し合いに参加しており、提出物の状況は8割良好であること、指示後の課題実施においても、5割以上が良好である結果となった。

学校生活の現状は、全体的には、学校への参加のための準備やその実施において良好な状況が見られていること、重複障害ありの幼児児童生徒においても、学校生活のためのしっかりとした準備と比較的良好な実施が行われており、参加状況においても4割以上の幼児児童生徒が参加するなどの状況が示された。

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学校生活に関する総合評価を表 7-28 に示す。全体として、7割以下の幼児児童生徒が大きな問題なく学校生活を送っていること、しかしながら、25%以上の学生たちが学校生活でのサポートが必要であり、重複障害ありの幼児児童生徒の場合は、4割以上の学生が学校生活の面におけるサポートを必要としている結果が示された。

表 7-28 学校生活の総合評価

学校生活（全体）	8点以下	9点以上	無回答	平均評定値
全体	25.6	69.6	4.8	9.83
重複障害なし	21	76.2	2.8	10.17
重複障害あり	42.2	51.6	6.2	8.7

なお、学校生活の指導の現状と課題に関する記述では、次のような内容が見られた。

① 幼稚部（121 件）

- ・指導上の工夫、個別対応
- ・ことば・コミュニケーション
- ・保護者・家庭との連携・保護者支援
- ・気持ちの安定、意欲、課題に対する意識
- ・基本的生活習慣、身辺自立
- ・対人関係

① 小学部（123 件）

- ・生活リズムが崩れやすい
- ・提出物等の忘れ
- ・聞き漏らし
- ・他人の心を推測することが難しい
- ・家庭との連携し、意識的な生活習慣を形成する
- ・語彙・文法力の不足
- ・発音の曖昧さ
- ・感情表現が難しい
- ・興味関心の幅が狭い

② 中学部（53 件）

- ・指示の理解の確認が必要
- ・提出物・宿題・忘れ物が多い
- ・言語力の不足し、うまく表現できない
- ・予定に応じた行動や順序立てた行動の実行が難しい
- ・家庭生活と生活習慣の不規則
- ・注意、集中力の欠如
- ・整理整頓ができない
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない
- ・障害認識、自己認識ができていない
- ・相手の心情理解にやや課題がある

③ 高等部（63 件）

- ・心理的不安定さ
- ・集団行動、社会性の問題
- ・自立心やセルフコンピテンスの欠如
- ・計画性のなさ
- ・学習や生活の態度
- ・コミュニケーションの課題
- ・個別指導が必要
- ・メモ、例示による確認
- ・ルール作り
- ・教職員の連携による対応
- ・発音が不明瞭、自信のないことばを更に小さく発音し、コミュニケーションの成立を妨げている
- ・自ら発信することに苦手意識
- ・自ら意志を主張することは少なく、積極的に関わろうとしない

- ・手話の併用
- ・学習に向かう意欲の弱さ、モチベーションの課題

5) 学校での行動

学校での行動については、「そぐわない行動・不適切行動の程度」、「ストレス・情緒的落ち着きなさの程度」、「対人関係の維持の程度」の3つの項目について、5段階で評価し、3つの項目の評価の合計点が平均以下の場合、幼児児童生徒の現状と課題について記述を求めた。

(1) 評価項目の結果について

学校での行動の現状に関する3つの評価項目の結果を、表7-29に示す。

全体的には、そぐわない行動や不適切な行動の程度は、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べると、同等以上が8割弱以上、2割強は多さを指摘されている。ストレスや落ち着きなさの程度状況においても、3割弱の幼児児童生徒ストレスが多い結果が示された。人間関係においても85%以上の幼児児童生徒が良好な関係を維持していることが示された。重複障害ありの幼児児童生徒においては、4割以上においてそぐわない行動が多く出現しており、ストレスや落ち着きなさの多さの割合も4割以上に上っている。しかしながら、重複障害のある幼児児童生徒であっても8割以上の幼児児童生徒が良好な人間関係を築いていることもうかがえる。

表 7-29 学校での行動の現状

そぐわない行動 ・不適切行動	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	19.6	30.4	27	12.9	7.8	2.3	3.42
重複障害なし	21.9	33.8	28.8	10.2	4.7	0.6	3.58
重複障害あり	12.7	20.9	22.5	22.9	18.3	2.6	2.97
ストレス ・落ち着きなさ	ない (5点)	ほとんどない (4点)	時々ある (3点)	やや多い (2点)	多い (1点)	無回答	平均評定値
全体	11.2	27.1	31.6	17.3	10.3	2.5	3.2
重複障害なし	12.8	29.2	34.5	15.9	6.7	0.9	3.26
重複障害あり	6.5	19.9	24.8	23.9	22.2	2.6	2.64
良好な人間関係の維持	非常に良好 (5点)	良好 (4点)	ふつう (3点)	あまり良好で はない(2点)	良好ではない (1点)	無回答	平均評定値
全体	11.3	40.4	34.9	8.9	2	2.5	3.51
重複障害なし	13.2	45.1	31.1	8	1.7	0.9	3.61
重複障害あり	6.2	26.8	49.3	12.1	3.3	2.3	3.21

(2) 平均以下の幼児児童生徒の現状と課題

3つの学校生活に関する総合評価を表7-30に示す。全体として、6割以下の幼児児童生徒が大きな行動上の問題なく学校生活を送っていること、しかしながら、35%以上の学生たちが学校生活において行動上の問題に対するサポートが必要であることが示された。重複障害ありの幼児児童生徒の場合は、6割近くの学生が学校生活の面におけるサポートを必要としている結果が示された。

表 7-30 学校での行動の総合評価

学習態度（全体）	9点以下	10点以上	無回答	平均評定値
全体	35.2	61.9	3	10.05
重複障害なし	29.7	69.1	1.2	10.44
重複障害あり	55.9	40.8	3.3	8.72

なお、学校での行動の指導の現状と課題に関する記述では、次のカテゴリーが見られた。

① 幼稚部（138 件）

- ・集団行動、状況把握、ルール理解、抵抗に課題
- ・気持ちの安定・意欲・積極性に欠ける
- ・活動や指導の工夫、個別対応が求められる
- ・衝動性、落ち着きのなさ、こだわりの問題
- ・自己中心的行動
- ・対人関係の課題
- ・ことばやコミュニケーションの課題
- ・家庭や保護者支援

② 小学部（148 件）

- ・自分本位の行動が多い
- ・障害理解、自己認識の欠如
- ・突発的なことへの対応が苦手
- ・興味のある物への衝動性
- ・家庭との連携し、意識的な生活習慣を形成する

③ 中学部（79 件）

- ・他者理解の困難
- ・情緒・心理面での不安定さ
- ・日常生活上のマナーの欠如
- ・言語表現力
- ・注意、集中力の欠如
- ・友人関係上のトラブル
- ・コミュニケーションのルールやマナーが守れない

④ 高等部（83 件）

- ・心理的不安定さ、ストレス
- ・行動面の課題
- ・メタ認知の欠如
- ・障害認識や自己理解の欠如
- ・状況理解や判断の難しさ
- ・見通しを立てることの難しさ
- ・社会性や集団活動の課題
- ・コミュニケーションや対人関係上のトラブル
- ・定期的な話し合いやカウンセリングが必要
- ・個別指導が欠かせない
- ・ルールを守り、予定を立てることが難しい
- ・手話活用の問題

Ⅱ まとめと今後の課題

1. 回答状況について

今回の調査では、全国聴覚特別支援学校（聴覚障害）107校に在籍する幼児児童生徒5,706人のうち、人工内耳装用幼児児童生徒1,894人を対象に実施され、726人の担当教員から合計1,350人分の回答が得られた。このことから、全国特別支援学校在籍幼児児童生徒における人工内耳装用率は概ね33.2%であること、これらの人工内耳装用幼児児童生徒のうち、本調査への回答率は71.3%であった。

2. 教員について

回答教員の教育歴の平均は17.9年、そのうち聴覚障害幼児児童生徒に対する指導歴の平均は11.3年であることから、比較的聴覚障害教育の経験が長い教員であるといえる。しかし、回答者の特別支援学校（聴覚障害）の中で、指導歴5年以下または10年以下の教員が全体の約68%に上っていることや、公立学校での勤務年数による異動などを考えると、人工内耳装用児を含めた聴覚障害教育における専門性向上に向けた持続的な取組が必要と思われる。求められる研修の内容も、人工内耳に関する基礎的な内容から他機関との連携まで多岐に渡っており、教員の経験年数や専門性に応じた研修会の開催が望まれる。

3. 幼児児童生徒の実態について

調査の結果、受診時期は概ね1歳前半であった。

人工内耳装用状態は、右の片耳装用が一番多く、次に両耳装用と左の片耳装用が同程度であった。重複障害のある場合は、両耳装用の割合が高く、積極的に音を活用するためのものと思われる。人工内耳装用開始時期は、2歳台が一番多く、次に、1歳台と3歳台がほぼ同じ割合で多かった。手術後の聴力は、人工内耳装用後40～50dBHL、重複障害による影響はほとんど見られないが、左耳より右耳の方が幾分聴力レベルが高い傾向が示された。

重複障害の種類としては7割以上が知的障害との重複であった。

普段使用しているコミュニケーション・モードは、重複障害のない幼児児童生徒では、音声、手話、指文字が多く使われていた。学習時も、音声が一番多く、次に手話、その次に指文字が多く使われていた。重複障害のある幼児児童生徒は、手話が一番多く、次に、音声と指文字がよく使われていた。

対象幼児児童生徒の学校歴では、他の教育機関へのアクセスは幼児期が一番多く、幼稚部、小学部、中学部へと年齢が上がるにつれて、特別支援学校（聴覚障害）への在籍者の増加が示されていた。今後の進路では、対象幼児児童生徒の70～80%が上の学部への進学を希望していること、高等部以降の進路としては、重複障害のない生徒は大学等への進学希望と就職の割合が同じ程度であった。重複障害のある生徒の場合は、就職希望が75%を示した。

聴覚活用の状態は、7割以上が良いとの評価であったが、言語音の聞き取りや傾聴態度の良い

評価は若干下がる傾向であった。

同年齢の健聴幼児児童生徒に比べて、本調査の幼児児童生徒の言語力は概ね 7 割以上が低い評価を得ており、重複障害のある幼児児童生徒の場合は 9 割以上低い結果が示された。言語活動に関する指導の現状においても、語彙力、言葉の聞き取る力、文法力、状況把握力、言語活動に関する意欲の不足などが示唆された。

4. 学校での学習・生活について

学業成績では、潜在的な学習能力は高く評価されているものの、幼児児童生徒の 5 割以上が、同年齢の健聴の幼児児童生徒に比べて、学業成績が低く、2 割のみが同等あるいはそれ以上であることが示された。学業成績を支える読書力においても、同じ傾向が見られている。学業成績では、重複障害なしの約 5 割、重複障害の 76% がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学習態度においては、6 割以上の幼児児童生徒が健聴の幼児児童生徒に比べて、注意力、注意持続、指示後の実行における低さが指摘されている。学習態度においても、重複障害なしの約 4 割強、重複障害の 7 割以上がサポートなどの支援が必要な状態であった。

コミュニケーション能力では、幼児児童生徒の 6 割が、健聴の幼児児童生徒に比べて、低く、コミュニケーション力を支える語彙力や口述力の低さの影響も示されている。コミュニケーション能力においては、重複障害なしの約 87%、重複障害の 94% がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学校生活では、学校での参加状況は比較的良好であること、学校での参加を支える提出物の状況や指示後の遂行においても良好であった。学校生活では、重複障害なしの約 2 割、重複障害の 4 割がサポートなどの支援が必要な状態であった。

学校での行動においても、その場にそぐわない、適切ではない行動の出現やストレスや落ち着きなさの頻度は、健聴の幼児児童生徒に比べて、顕著に多くはなく、85% 以上が良好な人間関係を維持していた。学校での行動においても、重複障害なしの約 5 割、重複障害の 56% がサポートなどの支援が必要な状態であった。

5. 今後の課題

今回の分析により、人工内耳装用による音や聴覚活用における肯定的な影響とともに、補聴器装用時において常に指摘されてきた言語発達の問題が、人工内耳装用においても同じ現象が見られていることが示唆された。詳細の把握のためにさらに検討を進める必要がある。

なお、今回の分析は、特別支援学校全体のデータを単純集計した結果に基づく検討に留まっている。学部間の変化や特徴の詳細について検討する必要がある。大量の記述式の意見に関しては、全体のカテゴリーに基づく細かい検討も必要である。また、人工内耳装用時期、装用状態、コミュニケーション・モードに基づく聴覚活用、言語活動、学校での学習と生活に関する程度との関連についても、詳細な分析が求められている。同時に、それぞれのデータが示す意味を深めるための、指導法や工夫に関する追跡調査も今後必要である。